

概要報告

実施期日	7月28日(火)【午後】
部会名	小学校 特別活動部会

テーマ 『 望ましい人間関係を形成するための異学年交流 』

提案概要

【実践に向けての課題意識】

昨今、少子化によって兄弟姉妹の数や児童数が減ることにより、子どもたちの望ましい人間関係の形成がしにくい状況になっている。そこで、本市教育研究会特別活動部会では、次のような児童の育成を目指し異学年交流を積極的に行っている。これは、異学年と積極的に遊ぶ姿を求めているのではなく、交流を通して望ましい人間関係の形成を図ることを目的としている。

- ・集団としてのまとまり方を知っている児童
- ・自分の役割を果たすことに喜びを感じる児童
- ・伝統を引き継いでいく児童
- ・リーダーシップが発揮できる児童
- ・安心して学校生活を送ることができる児童

【実践の概要】

学校教育目標達成のために、前任校、現任校において、異学年交流を積極的に行った。

前任校では、児童会の企画を中心として、他学年との交流を活性化させた。児童会の企画であるペア学年集会、クリーンデー、それ以外にもペア遠足、絵本の読み聞かせなど多くの交流イベントも行った。

そうした関わりの中で、高学年には「リーダーシップが発揮できる児童」の姿を見取ることができた。

また、どの学年においても、それぞれの役割が果たされ、互いの存在の大切さを知ることで、「自分の役割を果たすことに喜びを感じる児童」の姿を見取ることができた。

現任校では、1～6年のたてわりグループで休み時間に異学年交流会を行っている。6年生の児童に高学年としての自覚が育っていることに加え、5年生には「来年は自分たちが学校を引っ張っていこう」という気持ちが芽生えた。

【成果と課題】

- ・異学年交流は、児童がクラス内での人間関係作りを行う力を育てるうえでも有効であることが分かった。
- ・異学年交流の評価の方法としては、ふりかえりカードで見取ることができるが、児童の人間関係づくりに関わる力の伸長を見取することに難しさを感じた。

研究協議概要

6グループに分かれ、提示した協議の柱を中心に、各学校の実践や意見を出し合った。

グループ協議後、グループごとに協議の内容を全体に発表した。

協議の柱①：望ましい人間関係を形成するための各学校での異学年交流の取り組みについて。

◆各校の実践

- ・ペア学年での野外給食
- ・上級生がクイズなどのゲームをする仲良しランチ
- ・2学年、3学年での遠足
- ・全校遠足
- ・全校たてわりグループによるウォークラリー
- ・たてわり掃除
- ・兄弟学級を決めての交流
- ・登校班を活用した異学年交流
- ・6年生が3年生にリコーダーを教える
- ・名刺交換、年賀状交換
- ・あいさつ運動
- ・集会委員、児童会で子どもたちから企画、運営
- ・運動会でペアの子同士で踊る
- ・連学年で行う
- ・組体操を上級生が教える
- ・プールを1、6年で行う
- ・学習の成果を発表し合う（鎌倉での校外学習を6→5年生に、その他学習発表も）
- ・1年生と6年生の交流…各校ともに盛んで、様々な取組があり、成果をあげている
- ・朝自習（お世話やリーディングバディ）
- ・清掃の手伝い、やり方を教える
- ・給食の片付け、教える

◆課題など

- ・大きなイベントを一回より、短時間でも定期的に行った方が、交流は深まるのではないか。
- ・ハードルを高くしすぎない。気軽に、回数多く。
- ・3、4年生で交流をすると、児童同士の関わり方が難しく感じるため、目的をしっかり決めたうえ、交流を行う。
- ・委員会活動などでは、子どもの意見からイベントを企画したい。
- ・交流が少ない大規模校もある。 ・人数が多いと1、6年以外の学年のたてわりが厳しい。
- ・下級生には優しくできても、クラス内での変化が少ないこともある。
- ・学校全体で、どんな子にしたいのかビジョンを共有しないといけない。
- ・学校として考え、イベントや仕組み、組織などを大きく変える。
フェスティバルをたてわりで…クラス単位でなく。
教室配置…あえて低学年と高学年を同フロアに。
学校組織にメスを…異学年交流についての担当、分掌を設ける。

協議の柱②：異学年交流全般の評価の仕方について

◆評価の仕方

○自己評価と他者評価

- ・企画、運営した側の振り返り。 ・振り返りカード ・アンケート ・質問紙 ・チェックリスト
- 「書く」ことで、自分なりの評価をするだけでなく、教師側も個々の様子を推し量ることができる。
- ・お礼の手紙。書く側も、受け取った側も得られるものがある。
 - ・教員間で連携し、情報を伝え合い、共有することで、見取りの充実が図れる。（活動中の児童の様子など）

◆現状の課題など

- ・多忙化の中、評価することが難しい。 ・評価が、子どもたちの次への動機付けになれば。
 - ・継続的に、繰り返し取り組むことが重要。 ・年間を通して評価していくことで、子どもたちの変容を見取りたい。
- い。
- ・同じ行事であっても、発達段階によってねらうものは違ってくる。低・中・高学年毎のめあてが必要。
 - ・交流をすることの意義、目的をしっかり子どもたちに伝えておくことが大事。
 - ・ただやっただけになってしまいがち。こなすだけにならないように、趣旨説明、めあての明確化が大切
 - ・単に楽しむだけになってしまう ⇔ 「楽しむ」だけではだめなのか？

まとめ概要

- ・特別活動において、評価も含めた計画を策定するのは大変である。しかし、しっかりと計画を立てることによって、めあてを明確にすることができ、子どもに課題意識を持たせたり、見取ったりする際に有効である。
- ・事後の評価は、振り返りカードだけでなく、発達段階や集団の状況に応じて、質問紙やチェックリストなども有効。
- ・事後だけでなく、事前、本時も含めた、一連の活動過程の中で評価する必要がある。
- ・たてわりのグループ間で、グループノートをつけると、上級生、下級生ともに新たな気づきがあり、自己有用感の伸長や、メタ認知につながる。
- ・学習指導要領や学習指導要領解説においても、「異年齢集団による交流」の充実を図る旨の記載が多々見られる。
- ・学校規模なりにできる交流もある。小規模校だからできる、小規模校しかできないではない。各校の状況に合わせた形で工夫して、交流をすすめるべきである。
- ・各自、もう一度、学校教育目標を確認すべき。学校教育目標をとらえたうえで、それに沿った形で、異学年交流を仕掛けていってほしい。